ことばと文化の学び（6）

—「伝わる」工夫とやさしい日本語に関する一考察—

Language and Culture Education (6)

— Important but Neglected Aspects of Plain Japanese for Better Communication—

仲 潔*

NAKA Kiyoshi *

［キーワード Keyword］　やさしい日本語，マルチリテラシーズ，言語観
（Plain Japanese, Multiliteracies, Language Awareness and Attitudes）

［所　　属 Institution］　* 岐阜大学教育学部（Faculty of Education, Gifu University）

［要　　旨 Abstract］

本稿は、学習者の言語や文化、コミュニケーションへの見方・捉え方（以下、言語文化観とする）にゆさぶりをかけ、物事を広い視野から多角的に判断できる力を育成することを狙う筆者の教育研究の一環に位置付けられる。本稿では、外国人市民への情報提供を促進する手段の1つである「やさしい日本語」を取り上げ、コミュニケーション全般において情報を「伝える」ことがより他者に「伝わる」にはどのようなことに留意すべきなのかを考察する。「やさしい日本語」は、語の言い換えや文構造の平易化など主に言語面に焦点を当てられることが多い。ことばの「正しさ」や方向性が提示されることで私たちはその言語を学びやすくなる。そのこと自体に価値はあるが、同時に「正しい」言語表現・言葉遣いが必ずしもコミュニケーションの成立を保証するわけではないことには留意したい。ことばは常に変化し続けているため、ことばの「正しさ」を過度に強調することはかえってコミュニケーションを阻害してしまう危うさも持つ。

1. はじめに

1. 1. なぜ「伝わる」ことを考えるのか

2020年3月、岐阜市は「岐阜市多文化共生推進基本計画」(1)を策定した。その基本理念は、「誰もが互いに多様性を理解し合い、ともに新たな魅力を創造するまちをめざして」である。3つの重点目標が掲げられており、第１に「外国人市民が必要な情報を得られるまちづくり」、第２に「外国人市民の生活を支える安全・安心のネットワークがあるまちづくり」、第３に「多様性を生かした活気に満ちたまちづくり」とされている。1つ目は、わかりやすい情報伝達とコミュニケーションの支援の充実が期待される。2つ目については、外国人市民の抱える諸問題に、できるだけ外国人市民の母語で対応できる体制が望ましいだろう。3つ目においては、日本人市民と外国人市民の交流・学び・創造の場の充実が求められる。行政としては、可能な限り外国人市民の母語で情報提供を行うことが期待されるが、一般市民にまでそれを求めることは難しい。そこで、日本語を駆使してコミュニケーションを促進させることが現実的な選択肢の1つであろう。実際、岐阜市在住の外国人市民に行ったアンケート調査（「外国人市民の意識調査報告書」(2)、2020年）では、「やさしい日本語」を回答言語として選択する者が多かった。本稿では、いわゆる「やさしい日本語」を取り上げながら、より伝わりやすくするための工夫について論じたい。

本稿を論じる上で、言語に関するいくつかの通念を問い直しておく必要がある。そのうち最も重要なものは、「母語であれば、意思の疎通に苦労しない」という点である。結論を急ぐと、母語だからといって、その言語を用いたコミュニケーションにおいて不自由なく理解できるというわけではない。例えば、国連ハイレベル政治フォーラムにおけるJapan SDGs Action Platformでは、次のような文言がある。

HLPFは、2015年9月、国連サミットにおいて採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」文書において、同アジェンダの実施をレビューするグローバル・レベルでのフォローアップ・プロセスと位置づけられている会合です。(3)

上記の引用について、「何語で書かれているか」と尋ねられれば、日本語を母語とする人のうちの大半が「日本語」と答えるであろう。引用中にある“HLPF”とは、“High Level Political Forum”の略であるが、それを除いてもいったいどれほどの日本語を母語とする人が、引用文の内容を苦もなく理解できるだろうか。たいていの自然言語には、さまざまな異言語が語や句、文構造などに影響を与えつつ共存しているのが社会言語的事実である。ある言語が均質的な言語空間を形成しているわけではないことは自明である。つまり、「〇〇語」には「〇〇語」以外のさまざまな言語が混在しているのだ。また、この「〇〇」はたいていの場合、民族・国家との同一性が暗黙の前提とされることが多いが、そのような言語観の再考が促されて久しい（酒井 1997；山本・臼井・木村 2004など）。つまり、言語にははっきりとした輪郭はなく、1つの言語共同体に同一化することが出来ないとする言語の捉え方（言語観）である。外部の観察者からすれば異なった言語的特徴を有する場合であっても、当の集団構成員は言語境界線を見出さず、1つの言語として認識する場合もあるのだ（仲 2006：4）。以上から、本稿で筆者が前提としている問題意識の根底には、「母語話者がその言語の理解者である」とする一種の母語話者至上主義（ネイティブスピーカーリズム(4)）と、言語が民族や国家と結びつき均質的な言語空間を有するとする「言語的近代」（山本・臼井・木村 2004）の言語観がある。以上を踏まえて、次に「伝わる」ことについて考察しておこう。

2. 「伝わる」とは

同じ言語であれば、コミュニケーションが成立するというわけではない。異言語使用者同士の場合にはなおさらである。そこで、他者に対して伝わりやすい工夫がなされる。そのうちの1つが、平易な語や文構造を用いる、というものだ。もちろん、難解な語や文よりは伝わる可能性は高いかもしれないが、問題がないわけではない。

2.1 平易な文は伝わりやすいのか

容易に伝わりそうな日本語であっても、必ずしも話し手が「伝えよう」とした内容と、聞き手に「伝わった」内容が同一となる保証はない。例えば、鈴木（2020）が挙げている事例である「私は鈴木が書いた論文を読んでいない」という多義的な文について考えてみよう。この文には、①（私ではなく）田中が鈴木が書いた論文を読んでいる、② 私は（鈴木ではなく）佐藤が書いた論文を読んでいる、③ 私は鈴木が（書いたのではなく）読んだ論文を読んでいる、④ 私は鈴木が書いた（論文ではなく）エッセイを読んでいる、などの解釈の可能性がある（鈴木 2020：157-158）。元の文は平易な表現であるが、その文を受け取る側には複数の解釈の可能性がある。平易な文だからといって容易に「伝わる」とは限らないのだ。

いくつかの文からなる文章についても、その書かれている言語を日常的に用いているからといって「伝わる」とは限らない。以下は、同じく鈴木（2020）が紹介しているものであり、Bransford and Johnson（1972）を訳したものである。

手順はまったく簡単である。まずものをいくつかの山にまとめる。もちろん、量によっては一山でもよい。設備がその場にない場合は、次の段階としてどこか適当な場所に行くことになるが、そうでない場合は準備完了である。やりすぎないことが重要である。つまり、一度にあまり多くの量をこなすくらいなら、少なすぎる量をこなすほうがよいということである。短期的には、これは重要なことでもないように見えるかもしれないが、やっかいなことはすぐに起こる。これをミスると高くつくこともある。最

初は手順全体が複雑なものに見えるだろう。しかし、すぐにそれは単なる生活の一側面にすぎなくなってしまうだろう。近い将来この仕事が必要でなくなるという見通しを立てることは難しい。誰にもわからないことである。手順が完了すると、またものをいくつかの山にまとめ上げ、それらを適切な場所に入れる。やがてそれらはもう一度使われ、このサイクル全体を繰り返さなければならなくなる。しかしこれは生活の一部なのである。

（同：159）

上記の文章は、１文１文が難しいということはないだろう。しかしながら、全体として何を伝えようとしているのか分かりづらいかもしれない。ところが、この文章は「洗濯物」について書かれているという文脈（場面や状況）が与えられればどうだろうか。平易に理解することができるのではないだろうか。このように、文の伝わりやすさは語彙や文法だけではなく、場面や状況といった文脈にも依存している（cf. Gee 1996）。

2.2 「伝える」側の心構え

コミュニケーションにおいて、情報の発信側が「伝える」内容と、その情報の受け手に「伝わる」内容が同一であることもあれば、そうではないこともある。すなわち、「伝える＝伝わる」場合と「伝える≠伝わる」場合である。

「伝える＝伝わる」場合、同じ内容でも難しい表現を多く用いると、相手に「難しそう」な印象を与えがちである。そのため、伝えたいメッセージをシンプルに伝えようとする姿勢が望ましい。その際、後述するように、視覚情報を提示したり具体的な事例を挙げたり、あるいは「やさしい日本語」を活用することなどがあろう。その逆に、「伝える≠伝わる」場合はどうだろうか。情報の発信側がどれだけ相手に配慮をしても、どのように相手にメッセージを解釈されるのかはわからない。とはいえ、発話の際の言葉遣いや視覚情報の併用などの「伝えようとする努力・姿勢」は伝わる面はあろう。したがって、いずれの結果が待っていようとも可能な限り相手に対して真摯に情報を伝えようとする姿勢が望まれる。「伝える」内容が「伝わる」内容と同一か否かは発話の時点ではわからないため、情報を発信する上では常にこのような姿勢が必要だと考える(5)。

2.3 コミュニケーションの過程

ここで、コミュニケーションの過程について確認しておくことは有益だろう（以下、仲2017：124-126を参照）。なぜなら、「伝える」内容を相手に「伝わる」ようにやり取りを行うことがコミュニケーションの姿であるからだ。

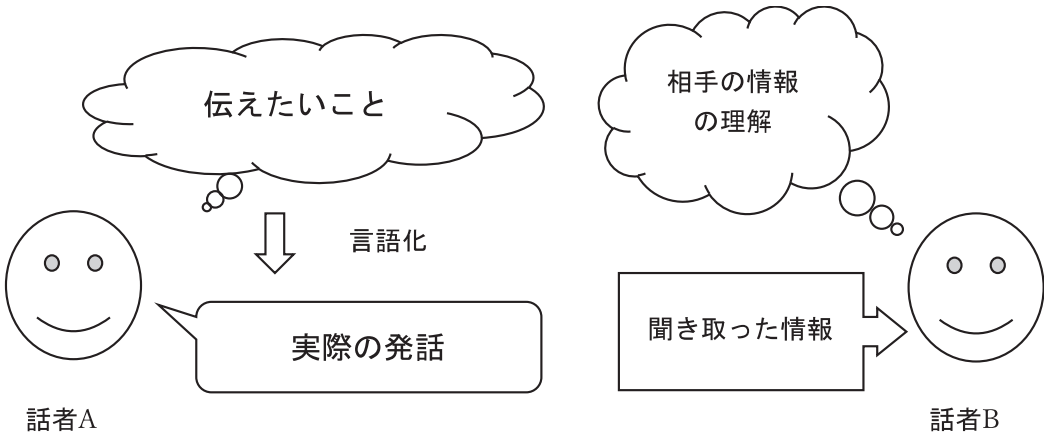

図. コミュニケーションの過程

上図において、「話者A」が何かを「伝えたい」としよう。話者Aは「伝えたいこと」を「言語化」しようとする。そして「実際の発話」には、話者Aの言語表現力がもちろんかかわるが、言い回しやたとえ、具体例

などにおいて、話者Aのそれまでの経験が無意識のうちに反映される。次に、ようやく発話された「実際の発話」を話者Bが聞くとする。どの程度まで聞き取れるのかは、話者Bのリスニング力だけではなく、その場のコミュニケーションにおける状況や環境（騒々しい場所とか、電話越しなど）も影響する。さらに、その「聞き取った情報」を解釈し「相手の情報の理解」を進めるには、話者Bのそれまでの経験が影響を与える。例えば、話者Aが野球をたとえにして何かを伝えた場合に、話者Bが野球に関心がなければ「相手の情報の理解」を正確に進めることは難しいだろう。さらに、このようなプロセスにおいて、すべての段階が「正確に」行われる保証はどこにもない。つまり、コミュニケーションにおいて、各個人の言語表現力を正確にしたからといって、それがコミュニケーションの成立に繋がるとは限らない。

社会学者の土井（2009）が述べるように、「コミュニケーション能力ほど、その評価が他者の反応に依存するものはない」（同：278-279）。コミュニケーションとは、その原理的な性質からして、決して自己内で完結するものではなく、つねに他者との関係の総体」（同）である。キャッチボールで投げ手側が「いいボールを投げた」と思っても、相手が取れなければ「キャッチボール」は成立しない。どのようなコース、速さが相手にとって「とりやすい」のかは、相手の力量によって変化する。上手にキャッチボールをする人は、相手の力量に応じて投げることができる。また、投げる側がうまく投げられなかった場合でも、受ける側が上手にキャッチすることもある。それと同様に、コミュニケーションにおいても相手との「関係性の水準」から捉えるコミュニケーション観が不可欠である。情報・メッセージの発信側の発話を、受け手側がどのように受け止め、解釈するのか。このような受け手側への視点や他者への配慮も含めたコミュニケーション観は、「やさしい日本語」を学び、コミュニケーションにおいて活用する上でも重要になるだろう。

このようにコミュニケーションに参加する人どうしの関係性を前提にするならば、各個人が発信する情報に対して、必ずその受け手側がどのように解釈するのか、という視点を考慮に入れなければならない。つまり、情報の発信側にばかり焦点を当てて、それぞれが情報を発信「しあう」ようなコミュニケーション能力観では不十分である。なぜなら、自らの発話に対して、相手がどのように受け止め、解釈し、さらにどのように返答するかによって、次の発話内容は変化するからだ。

これに加えて、コミュニケーションをしている「自分」と「相手」の人間関係からも、コミュニケーションは影響を受ける。相手によって発話の仕方も変われば、受け止め方も異なるものである。同じ内容を伝えたい場合でも、相手が上司である時と友人である時とでは違う表現を用いることが自然であろう。また、同じ「上司」や「友人」というカテゴリーに属す人であっても、その人との人間関係によっても、言葉遣いや相手の発話の解釈に影響がある。以上から、たとえ「正しい発音」、「正しい文法」を身につけ、適切な場面・状況で、適切に発話をしても、コミュニケーションが成立するかどうかは誰にも保証できない（Gee 1996）。それゆえに、コミュニケーションを通して他者との人間関係を構築するのであれば、他者への配慮を伴わなければならないと考える。次節では、「ことばのやさしさ」について考えておこう。

3. ことばの「やさしさ」について

本稿ではこれまでに何度か「やさしい日本語」という文言を用いてきた。本節では、ことばの「やさしさ」について考えていく。

3.1 ことばの「わかりやすさ」について

2.1で述べたように、平易な文、つまり「易しい」日本語だからといって伝わりやすいわけではない。言語を「易しく」する際に持ち出される方策の1つが、「言い換え語」である。しかしながら、相手にとって「わかりやすい」かどうかは相手の言語能力に依存するため一枚岩で解決できるわけではない。例えば次の対になった語について、いずれを「わかりやすい」と判断するのかは人によって違う。

外来語	言い換え語	わかりやすさの比率
ケア	手当て介護	ケア：手当て介護＝93：7
デイサービス	日帰り介護	デイサービス：日帰り介護＝91：9
コンプライアンス	法令遵守	コンプライアンス：法令遵守＝12：88
アセスメント	影響評価	アセスメント：影響評価＝25：75
ワークショップ	研究集会	ワークショップ：研究集会＝57：43

表1. 外来語と言い換え語のわかりやすさの比較

（渡部 2009：142より一部抜粋）

上記の表は、九州女子大学の学生203人を対象に、筆者と当時の指導学生が行ったアンケート調査結果の一部である。調査の目的は、国立国語研究所が提示した外来語の日本語言い換え語の案と、外来語のいずれがわかりやすいのかを調べることである。簡易なアンケート調査であるが、少なくとも「わかりやすさ」には個人差があることがわかるだろう。外来語を日本語に置き換えたらコミュニケーション上の問題が解決されるわけではなく、補足的な説明をしたり具体例をあげたりするなどの対処が求められることになる。

イギリスやアメリカでは、第二次世界大戦以降の移民増加などの影響もあり、難解な公文書の英文をよりシンプルで平易なものに改善すべきだという動きが見られる。例えばイギリスでは、1979年以降にPlain English Campaignが当時のサッチャー首相、続くメイジャー首相のもと展開されてきた。アメリカでも1970年代以降に契約文書の改訂を求める消費者運動をはじめ、カーター大統領、クリントン大統領、オバマ大統領とシンプルで平易な英語を用いることが推進されてきた（以上、角（2016: 77-93）をもとに要約）。

日本においても、阪神淡路大震災を契機に、外国人住民にとっての情報提供の手段として「やさしい日本語」が開発・普及してきている（庵 2013など）。その経緯ややさしい日本語の体系的な理解については本稿の手に余るため、次節では一般的に普及している「やさしい日本語」の方策について整理しておく。

3.2 やさしい日本語の基礎

定住外国人の増加傾向の背景には、人材のグローバルな移動や日本社会の少子高齢化・生産年齢人口の減少傾向、海外に職を求める傾向や人手不足といった問題がある。

岐阜市と岐阜大学が協力して実施したアンケート調査（『外国人市民の意識調査報告書』、2020年）によれば、回収した調査票の回答者を国籍で分類すると、中国が147名（45%）・フィリピンが76名（23%）・ベトナムが21名（6%）・ブラジルが10名（3%）、その他74名（23%）であった。この事前調査に基づき本調査では、「やさしい日本語」と調査協力者の使用言語（中国語、タガログ語、英語、ベトナム語、ポルトガル語から1つを選択）の２種類を送付した。その結果、中国語を選択して回答した者が104名でそのうち103名が中国籍であった。「やさしい日本語」を選択した外国人市民は101名で、そのうち中国籍が44名、フィリピン国籍が20名、ベトナム国籍およびブラジル国籍が4名で、その他の国籍の中からも29名であった。その他の国籍の外国人市民が選択した最も多い言語は英語であったが（43名）、日本語はそれに次ぐ多さであった（以上、『外国人市民の意識調査報告書』より）。このように、やさしい日本語を活用しようとする外国人市民は大勢いる。

やさしい日本語の体系について詳しく論じることはできないが、基本的には、①難しい言葉を避け、簡単な語を使う、②具体的に述べる、③１つの文を短くし、簡単な文構造で表現する、④言い換えられない言葉はそのまま使う、という方策がある（例えば、藤田・加藤 2018など）。

①については、例えば「今朝」という表現が相手にとって分かりにくい場合に「今日の朝」としたり、「昼食」を「昼ごはん」と表現することである。ただし上述したように、相手にとっての「わかりやすさ」は情報の発信側には判断できないので、状況に応じて④のように言い換えない方が良い場合もある。例えば、「（電気の）スイッチ」はそのままの方が伝わりやすいと想像される。①と④は語や句の話だが、文構造について配慮すべきなのが③である。例えば、「○○であり、▲▲なので、」を「○○です。▲▲です。だから、」と

言い換えた方がわかりやすい場合は多い。なお、2.1でも述べたように場面・状況がわからなければ、いくら文を易しくしても伝わりにくい場合がある。したがって②のように、できるだけ具体的に伝える姿勢も必要であろう。

これらは情報の発信側の工夫であるが、コミュニケーションでは相手意識を伴うことには留意したい。相手にとってのわかりやすさを発信側が判断できない以上、コミュニケーションを通じて互いに発話の意味を形成していく姿勢が不可欠である。すなわち「やさしい日本語」とは単に言語表現上の「易しさ」だけではなく、相手に対する配慮である「優しさ」も含まれている。

4. コミュニケーションから見た「やさしい日本語」の留意点

やさしい日本語は、言い換え語や文構造の簡易化など、言語そのものに焦点が置かれやすい。それ自体は問題ないのだが、本来の目的が外国人市民への情報提供ならば、言語そのものをコミュニケーションという全体像の中で捉えておく必要がある。

4.1 マルチリテラシーズ

「やさしい日本語」を用いる目的がコミュニケーションの成立にあるならば、やさしい日本語の言語体系を身につけるだけでは不十分である。なぜなら、やさしい日本語の言語体系を「正しく」身につけたとしても、コミュニケーションにおいては言語以外のさまざまな要素が影響を与えているからだ。コミュニケーションにおいて、発話の意味を構築するのは言語だけではない。視覚的なイメージや音響効果、空間なども意味構築に寄与する（Cope and Kalantzis 2000など）。

鈴木（2020）が指摘するように、「言葉というものは光景を分解する」（同：154）性質を持つ。言い換えると、「分解しない限り言葉で表すことはできない」（同）。例えば自分が見ている写真の内容を、他者に言語で伝えるならば膨大な量の言語化を伴う。その上、「分解ができないもの、しづらいものを言語で表現することはとても困難となる」（同：155）。異言語話者同士の対話では、言語化の困難さも増すことが予想される。しかも、相手も正確に聞き取れるとは限らない。言語以外の要素を用いながら他者に伝えるべきだと考えるのは、言語そのものが持つ伝達機能の限界ゆえである。

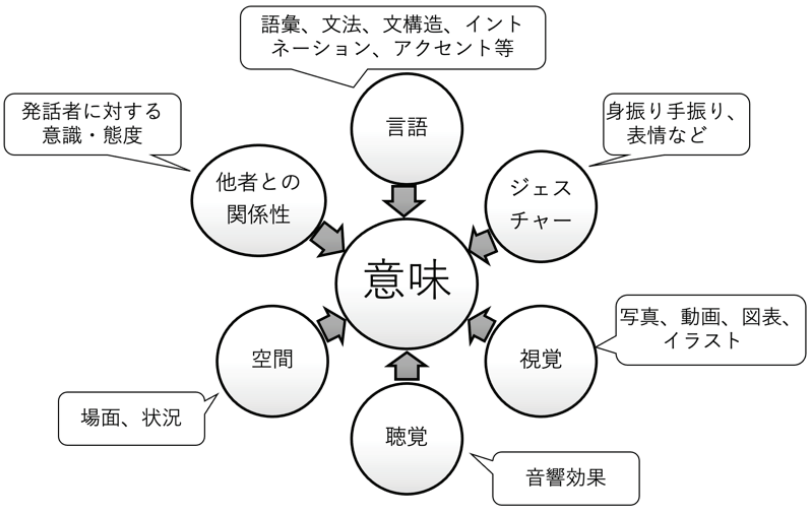

図 2. 発話の意味を構築する諸要素(6)

New London Group（2000）は、テキストを構成する要素を、言語・視覚・聴覚・ジェスチャー・空間およびそれらを複合したものとした（同：25-28）。コミュニケーションの過程とは、これら６つの要素からなるテキストを参与者同士が互いに意味を構築していくことである。これらに加え、他者との関係性も発話の意

味生成に影響を与える（ブルデュー 1991など）。例えば、同じ発話であっても、その発話者に対して聞き手がどのような感情や意識を抱いているかによって、異なる意味を形成し得る（図2.参照）。New London Group（2000）は、万能で「正しい」意味構築の方法を想定するのではなく、複合的な諸要素を駆使してコミュニケーションの参与者同士が協働的に、互いの意味を構築するマルチリテラシーズ理論を提唱した。そこでは、「学習者が経験したことのない種類や形式のテキストに初めて遭遇した際に、それを読み解くために必要な手がかりを探すストラテジーを培うための学習経験を「デザインする」こと」が「究極の教育目標」とされている（佐藤・熊谷2013：92）。

これら諸要素のうち「言語」のみに焦点をおき、コミュニケーション能力を育もうとするならば自ずと無理が生じるだろう(7)。上述のように言語の持つ伝達機能そのものに限界があるわけだから、言語を含んだコミュニケーションにおいて言語以外の要素も意識的に取り入れてコミュニケーション能力を育成するべきだと考える。還元すると、日本語の非母語話者である外国人市民への配慮から「やさしい日本語」を用いることをよしとしても、それだけで「伝える」ことを目指しても自ずと限界がある。言語以外の要素も駆使しながら、「伝わる」ことを目指すべきであろう。

4.2 ことばは変化が常態

「正しい」言葉遣いを想定し、それに忠実であることが、よりよいコミュニケーションに繋がると信じられやすい。しかしながら、言語学的に見た「正しさ」があるとしても、そのことを実際のコミュニケーションにおける意思の疎通や、ましてや外国人市民に対する「やさしい日本語」にまで当てはめることには無理がある。

4.2.1 ことばの「正しさ」は変化する

筆者は毎年、「やさしい日本語」に関するセミナーを行っている。以前、セミナー後にある受講者から次のような意見をもらった。それは「『お茶を淹れました』という発話は、日本人の心としては、相手に対して恩着せがましく失礼な印象を与えるので用いるべきではない」というものだ。もちろん、日本語学においてそう考えられることがあるのは承知している（例えば、金田一（1988）、斎藤（2013）など）。このような日本語の見方（言語観）を否定するつもりはないが、だからといって「やさしい日本語」にまで持ち込む必要はない。外国人市民に同化を押し付ける危うさを伴うことが懸念されるだけではなく、情報を伝える／伝わるという、ことばが本来的にもつ目的から離れてしまいかねないからだ。

ことばは変化することが常態である。それは日本語も例外ではない。このことについて考えるために、鈴木（2003）によるアイデアと引用部を以下に借用する。

(1) 現代の私たちが、毎日の社会生活の上で、言葉をどういうふうに話し、どういうふうに書いて生活しているのか、その事実を観察してみると、そこには、かなりひどい混乱がある。現代の日本人の言語生活は、ひどく混乱している。こういう声がしばしば聞かれる。そして、その観察が必ずしも誤りでないことは、だれしも認めないわけにはいかない。

(2) 何事も、古き世のみぞ慕はしき、今様はむげに卑しくこそ、なりゆくめれ、（中略）文のことばなどぞ、昔の反古どもはいみじき、ただ言うことばも、くちをしうこそなりもてゆくなれ、いにしへは、車もたげよ、火かかげよ、とこそ言ひしを、今様の人は、もてあげよ、かきあげよ、と言ふ…（中略）くちをしとぞ、古き人はおほせられし

上記の（1）は、1951年に刊行された鈴木久晴「現代の言語生活－その混乱と問題」（『国語教育講座』第1巻.「言語生活」下、刀江書院）が出典である。（2）は、吉田兼好による『徒然草』（第二十二段）である。今日においても「ことばの乱れ」を嘆く声は後を絶たないが、70年以上前も、徒然草の時代でも同様なのだ。言語が用いられる限り、その「正しい姿」は多かれ少なかれ変化せざるを得ない。

変化するのは、言語的な「正しさ」だけではない。「言語に対する感じ方」も時代とともに変化し得る。上

記の吉田兼好も「ことばの乱れ」を嘆いているのであった。同時代で切り取っても、発言を受け取る側の言語文化的背景によっても「言語に対する感じ方」は異なり得る。例えば、Samy & Geneva（2012）によれば、アメリカの元大統領・オバマ氏の英語は「黒人であっても、白人であるかのように明瞭に話す」と評された。その際、一方で、多くのアフリカン・アメリカンには、白人からの上から目線の褒め言葉として差別的に受け止められた。他方で、アジアをはじめとしたアメリカ合衆国への移民にとってはそうでもなかった、という指摘がある。同書によれば、オバマ大統領の言語使用を分析した結果、「白人的な」文法と「黒人的な」文体を用いることにより、双方の支持を獲得したと指摘されている（Samy & Geneva 2012）。このように、言語は「正しさ」だけではなく、その受け取められ方も変化し得るものである。

4.2.2 他者の言語使用に対する判断は変化する

言葉遣いの正しさも、その受け取られ方も変化するのであれば、コミュニケーションにおいて問題となるのは、その変化を受け入れないこと、その変化を認めずに自分自身が信じる「正しさ」を他者に押しつけてしまうこと、および自分の尺度で他者の発話を判断してしまうこと、などであろう。

先の例で考えてみよう。「お茶を淹れました」を「恩着せがましく感じる」のは、まずはその意見を私に伝えた方自身である。その方の対話の相手が同じように感じる保証はどこにもない。言語学的に見てそうであるとしても、人々は言語学的事実に則って生活をしているわけではない。ましてや、日常生活で日本語に困っている外国人市民にまで、そのことを求める必要はない。たとえある表現が、その言語の母語話者にとって違和感を覚えるものであったとしても、異言語使用者どうしの共通語として使うのであれば、細かい部分に目を向けるのではなく、コミュニケーションのプロセスでお互いに意味を作り上げていくという姿勢が求められる。「正しさ」も「感じ方」も固定的・静的に捉えられるものではないという社会言語的事実は、ことばを学んだり教えたりする上で今後より一層意識されるべき視点であろう。

「ことばの壁」という文言がある。これは、言語が異なることによりコミュニケーションに支障をきたすことがある、という意味である。これ自体は、言語を習得できるか否かという技能の問題である。ところが、他者の言語使用に対する態度が是正されない限り、いくら言語技能が上達してもコミュニケーションを通した良好な人間関係の構築は困難であろう。ことばの「正しさ」はその言語を学ぶ上での道標になることは確かだ。ただし、それにこだわり過ぎると「間違ったらどうしよう」という心的負担を生み出しかねない。そうなれば、ことばの「正しさ」はコミュニケーションにおいて「ことばの壁」をかえって助長しかねない。「やさしい日本語」を用いてコミュニケーションを図る上では、他者の言語使用に対する寛容な姿勢を併せ持つことが望ましいだろう。

5. おわりに

「やさしい日本語」は、外国人市民への情報提供を目的に研究・実践が積み重ねられてきた。「やさしい日本語」の文脈では、例えば「ルビをうつ」や「わかちがきをする」、あるいは言い換え表現を用いたり、シンプルな文構造を用いるなどの言語的特徴を中心として語られることが多い。それ自体の意義は認められるものの、このような「やさしい日本語」の基本規則に従ってコミュニケーションを図れば、外国人市民が情報を理解しやすいという保証はない。なぜなら、「正しく伝えれば、正しく伝わる」というほどコミュニケーションは単純ではないからだ。また、個々の外国人市民が持つ言語文化的背景や社会化・文化化で培ってきた価値観や経験が異なるため、万能な方法論では対処できないケースが想定されるからである。

本稿では、やさしい日本語そのものを論じるのではなく、コミュニケーション全般の観点から多角的に考察した。やさしい日本語は、外国人市民に対する情報提供を前提としている。その意味において、異言語間／異文化間コミュニケーションという文脈で考察されるべきだ、と考えるからだ。第1節では、日本語母語話者だからといって、日本語に精通しているわけではないとするネイティブスピーカリズムについて言及した。第2節では、日本語の文を平易にしたからといって、コミュニケーションにおいては必ずしも伝わりやすいと

は限らないことを述べた。場面や状況などのスキーマがコミュニケーションの参与者同士で共有されていなければ、平易な文であっても理解が困難なのであった。第3節では、語彙の言い換え表現を取り上げて、他者に対する「わかりやすさ」が一様ではないことを確認した。以上を踏まえ、第4節ではコミュニケーションの観点から「やさしい日本語」を再考した。コミュニケーションにおいて言語の果たす役割の重要性を否定するつもりはないが、それだけでは互いの発話の意味を構築できるわけではない。言語に加え、視覚や聴覚、ジェスチャーや空間といった複合的な諸要素を駆使して、互いの発話を理解し合おうとする、マルチリテラシーズ理論を取り上げた。同時に、ことばの「正しさ」や他者の発話に対する感じ方が変化するものであることを確認した。

繰り返しになるが、「やさしい日本語」の言語的特徴を探求することを否定するつもりは、筆者には毛頭ない。そうではなく、「正しい言葉遣い」が必ずしもコミュニケーションの成立を促進するわけではないということや、他者に「伝わる」ための不断の努力・配慮の重要性に重きを置いて論じてきた。いわば、「やさしい日本語」を用いる上での「使用上の注意」のようなものである。やさしい日本語をコミュニケーションの「道具」として用いるのであれば、本稿で取り上げた視点を併せ持つことで、「易しい」日本語は「優しい」日本語ともなり、他者にとってより「伝わる」ことが期待できるのではないだろうか。

（本研究の一部は、日本学術振興会の科学研究費助成事業［課題番号: 23K00743］による助成を受けている。）

（2023年9月7日受理）

【注】

(1) 岐阜市公式ホームページ（https://www.city.gifu.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/005/444/tabunkakeikaku.pdf）にて閲覧可能（2023年9月1日現在）

(2) 平成30年7月から平成31年3月にかけて、岐阜市と岐阜大学の共同研究として行った「外国人市民の意識調査」の報告書である。研究代表者は、今井亜湖（教育学部准教授[当時]）で、筆者も研究メンバーの一員である。

(3) https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/effort/index.htmlを参照。

(4) Holliday（2005）は英語教育研究において、「ネイティブスピーカー」の教師が「西洋文化」を表象していると信じられ、そこから言語的にも教授法的にも理想とされている状況や、ノンネイティブの教師が相対的に劣っていると捉えられてしまう見方を「ネイティブスピーカリズム」として批判している（同：6）。

(5) このようにコミュニケーションとは、情報の発信側が伝えようとしたメッセージを、他者との間でその内容の意味を協働的に構築するプロセスである。詳しくは、仲（2017）などを参照。

(6) Cope and Kalantzis（2000）およびブルデュー（1991）をもとに作成。

(7) コミュニケーションにおいて過度に言語の役割を強調することは、言語至上主義である。あるいは、あべ（2011）の言葉を借りれば「言語への不変の崇拝」（同：73）である。

参考文献

《日本語文献》

あべ・やすし（2011）「言語という障害 – 知的障害者を排除するもの」『社会言語学』（「社会言語学」刊行会）別冊1：61-78.

庵功雄（2013）「『やさしい日本語』は何を目指すのか」ココ出版.

岐阜大学・岐阜市（2019）『外国人市民の意識調査報告書』

金田一春彦（1988）『日本語 新版（下）』岩波新書.

齋藤孝（2013）『日本語の技法－読む・書く・話す・聞く　4つの力』東洋経済新報社.

酒井直樹（1997）「多言語主義と多数性－同時的な共同性をめざして」三浦信孝（編）『多言語主義とは何

か』(pp.228-245). 藤原書店.
佐藤慎司・熊谷由里（2013）「超文化コミュニケーション力とそれをめざす教育アプローチ」佐藤慎司・熊谷由里（編著）『異文化コミュニケーション能力を問う－超文化コミュニケーション力をめざして』、pp.87-96. ココ出版.
鈴木久晴（1951）「現代の言語生活: その混乱と問題」『国語教育講座』第1巻. 「言語生活」下.　刀江書院
鈴木宏昭（2020）『認知バイアス－心に潜むふしぎな働き』、講談社.
鈴木義里（2003）『つくられた日本語、言語という虚構 –「国語」教育のしてきたこと』右文書院.
角知行（2016）「アメリカにおける〈やさしい言語（Plain Language）運動〉」『社会言語学』16号: 77-93
土井隆義(2009)「フラット化するコミュニケーション－いじめ問題の考現学」長谷・奥村（編)、pp. 271–289.
仲潔（2006）「英語論の構図－英語帝国主義論と国際英語論の包括的理解のために」『言語政策』（日本言語政策学会）第2号：1-20.
――（2017）「期待外れの学習指導要領」藤原康弘・仲潔・寺沢拓敬(編)『これからの英語教育の話をしよう』pp.116-132. ひつじ書房.
藤田玲子・加藤好崇（2018）『やさしい日本語とやさしい英語でおもてなし』研究社.
ブルデュー、ピエール（1991）『話すということ』藤原書店.
山本真弓・臼井裕之・木村護郎クリストフ（2004）『言語的近代を超えて–〈多言語状況〉を生きるために』、明石書店.
渡部智恵（2008）「英語化する日本人のコミュニケーション－消費されるカタカナ語の実態」仲潔（編）『言語文化教育の諸側面』（九州女子大学人間科学部卒業研究論文集）2号：121-157.

《英語文献》

Bransford, J. D., & Johnson, M. K. (1972). “Contextual prerequisites for understanding: Some investigations of comprehension and recall,” *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior,* 11(6), 717-726.
Cope, Bill and Kalantzis Mary (Eds) *Multiliteracies: Literacy Learning and the Design of Social Futures*. London: Routledge.
Cope, Bill and Kalantzis Mary（2000）“Multiliteracies: The Beginnings of an Idea,” in Cope, Bill and Kalantzis Mary (Eds) pp. 3-8.
Gee, James Paul (1996, 2nd edition) *Social Linguistics and Literacies: Ideology in Discourses*. London: Routledge.
Holliday, Adrian (2005) *The Struggle to Teach English as an International Language*. Oxford: Oxford University Press.
Hymes, Dell (1972). On communicative competence. In J. Pride & J. Holmes (Eds.), *Sociolinguistics* (pp. 269–283). Harmondsworth, UK: Penguin Books.
New London Group (2000). A Pedagogy of Multiliteracies: Designing Social Futures. In Cope B., and M. Kalantzis. (Eds.) *Multiliteracies: Literacy Learning and design of social futures* (pp.9-37). Routledge.
Pennycook, A. and Emi. O. (2015) *Metrolingualism: Language in the City*. New York: Routledge.
Samy, H. Alim & Geneva Smitherman (2012) *Articulate While Black: Barack Obama, Language, and Race in the U.S.*, Oxford: Oxford University Press.